訳語としての「主観」と「客観」の成立について

―「此観」「彼観」との係わりを中心として―

李　貞和

Ⅰ　はじめに

周知の通り、日本の国語史における明治前期（明治二〇年まで）は、西欧語の影響による語彙の増加という特徴が見られる。それは西欧からの新しい思想や文物の取り入れにより、それに対応するため西欧語を外来語として借用したり、新しく訳語をたくさん造ったりしたからである。

当時造語された訳語として、今日まで用いられているものの中に、「主観」と「客観」とがある。この事実については、すでに、広田栄太郎氏の「訳語のあれこれ」[1]の中に、指摘されており、この「主観」（サブジェクト）と「客観」（オブジェクト）の用例が、西周訳の『心理学』（明治八、九年刊）[2]の中に発見できるという。また、『明治のことば辞典』[3]の中には、両語の意味を説明する部分に、

「主観」は明治時代の新語。英語subjectの訳語。「客観」は、中国では「立派な容貌」「外観」の意味であったが、英語のobjectの訳語として一般化した。

とある。右の説明によると、「主観」は、明治時代の新語である。「客観」は、中国の典籍に出典を持つ語であるが、日本では、その意味の変化した語にあたると言えよう。「客観」の語形については、「今日はキャッカンの読み方が普通であるが、明治時代にはカッカンが一般的であった。」とある。この辞書にも、注(2)で述べたように、『心理学』の再版にあたる『哲学心

理学』（以下、明治一一年版と称することにする。）の凡例（明治一一年刊）に、

致知家ノ術語観念実在主観客観帰納演繹総合分解ナドノ若キニ至リテハ大率新造ニ係ワルヲ以テ読者或イハ其意義ヲ得ルヲ難シスル者アラン」

のように、「主観」「客観」の見られることが指摘されている。

以上でみると、今まで、「主観」「客観」については、両語が、明治時代に新しく造語された訳語である。その用例が、明治八年刊行の『心理学』や、それの再版にあたる明治一一年版本の中に見られるということが指摘されている。ところが、今のところ、もし両語が訳語として、新しく造語されたとしたら、いつ頃、誰によって造語されたか、また、明治八年以前の資料の中に、その用例は、はたしてないのだろうか。そして、両語の原語に対して、ほかの訳語はあったかどうかなど、両語の成立の過程については、まだはっきりされてない面が多いと言える。『永見本百学連環』は、西周の明治三年一一月以降の育英社における講義を記録したものといわれる。実は、その中の致知学を説明する所に、

致知学たるものは即その道理に就いて論ずるものなり。茲に subjective（此観）及び objective（彼観）の二ツありて相関するなり。

（大久保利謙編、『西周全集』第一巻、日本評論社、一九六五年二月、一四七P）

のように、「subjective」と「objective」の左側に「此観」と「彼観」という訳語が記されてある。「此観」「彼観」の原語の英語は、両方とも「主観」「客観」の原語である「subject」「object」の形容詞型にあたるが、名詞として訳されていることがわかる。このほかにも「此観」と「彼観」という用例は、明治三年から七年までの西周の著書やメモ類（以下、西周関係の書物と称す。）などに見られる。このように「此観」「彼観」は、「主観」「客観」が訳語として使われる前に、「subjective」「objective」の訳語として用いられている。また、その原語が「主観」「客観」の形容詞であることで、互いに係わっていると考えられる。

そこで、本稿では西周関係の書物を資料[注1]として使い、その中に「此観」「彼観」と「主観」「客観」が、それぞれいつ頃どのような概念として使われているのか、また互いにどういう関係を持っているのかなどを中心として調べてみた。それによって、「主観」と「客観」の成立の過程をあきらかにしようと試みた。

（資料の引用に使う漢字表記は、現行のものに従った。）

II　辞書類における「主観」と「客観」

(1)諸橋轍次著『大漢和辞典』第三巻（大修館書店、一九八八年一月）

【客観】①外観。容貌。〔華陽国志、李雄志〕特長子蕩、字仲平、好レ学有二客観一。

とあって、「外観」「容貌」としての「客観」の意味が載っている。前述した『明治ことば辞典』の中に、中国での「客観」の意味といったのは、この用例によるものとみられる。出典の「李雄」という人物は、晋の国の人[注5]という。その面において、「外観」「容貌」という中国での「客観」の意味は、古くから日本で使われた可能性があるということになる。しかし、『古語大辞典』（角川、一九八七年）、『邦訳日葡辞書』（土井忠生編）、『五本対照改編節用集』上（亀井孝　考案並閲、勉誠社、一九七四年一一月）、『節用集文学漢字索引』（島田友啓編、孔版社、一九六三年一二月）、大槻文彦著『日本言海』（明治二二、一八九〇年一〇月）、『江戸語大辞典』（前田　勇編、講談社、一九七四年一〇月）などを調べたところ、そういう意味はみあたらない。

「主観」「客観」が訳語として見られるのは、次の(2)の辞書からであり、(3)の辞書にはその概念が説明されている。

(2)『哲学字彙』（井上哲次郎ら編、東京大学三学部印行、明治一四年[注6]）

subject　心、主観、題目、主意（論）

subjective　主観的

object　物、志向、正酷、客観

objective　客観的

(3)『教育、心理、倫理　術語詳解』（明治一八年刊）

〔主観（シュカクワン）〕（サブジーエクト）内界即心意中ヨリ発生スル百般ノ情態ヲ主観ト総称ス外界即客観的ノ知識ニ対スルノ語ナリ

〔客観（カックワン）〕（オブゼクト）吾身ノ外ニ在リテ吾機器即五官ニ感ズル根元ノ物アルノ智ヲ客観ト云ヒ……省略……而シテ客観ハ快楽苦痛ノ如キ心意内ヨリ発動スル作用即主観ニ対称スル者ニシテ外界ト云ヒ非我ト云フモ亦皆同義ナリ

右でみると、両語の概念は「主観―内界、情の作用」「客観―外界、非我、智の作用」のように説明されている。

右に引用した両辞書は、それぞれ明治一四と一八年に刊行されたもので、両方とも社会科学分野における学術用語を載せた

辞書である。これらの辞書が刊行された時期というのは、日本では東京大学を中心として専門分野での研究が盛んになりはじめた頃にあたる。すなわち、『東京大学―その百年―』(注17)によると、明治一〇年から一八年の間に、東京大学の設立や講義科目の整備、専門的な各分野での学会の設置などが行われ、今日にいたる学科の基礎が築かれたという。

以上で見ると、「主観」「客観」は、英語の「subject」「object」の訳語として、日本には、社会科学系の学術用語として紹介されたことがわかる。そして、この両語が、日本の国語の辞書に収されたのは、明治二〇年後半以降と見られる。明治二〇年刊行の大槻文彦著『言海』には、両語はまだ載っていない。それ以後、『明治のことば辞典』を参照すると、「主観」は落合直文著『ことばの泉』(明治三一年刊)以降の辞書の上に見られ、「客観」は大和田建樹編『日本大辞典』(明治二九年刊)以降の辞書に載っている。

では「主観」「客観」の原語である「subject」「object」という用語は、いつ頃から日本に入ってきたのだろうか。まず、幕末から明治初年にかけての英和対訳辞書類を調べてみた。「subject」「object」は、慶応二年版『ヘボン英和袖珍貴書』(江戸再版)には載っていない。一年後の慶応三年版『ヘボン英和袖珍貴書』(堀越亀之、江戸南成校)の中には、

subject 幕下、趣意、主

subjective 従属ノ

object 物、目当トスル物。主トナリテ居物

objective 外物ノ

のように、見られる。後の明治二年(一八六九)刊の『和訳英辞書』(島 正三監修、薩摩辞書初版)にも、右と同じ対訳が載っている。

外国語との対訳辞書の場合は、英和対訳辞書における「subject」「object」の和訳が見出し語として出るかどうかを調べてみた。安政四年(一八五七)『和蘭字彙』(杉本つとむ解説、早稲田出版部、一九七四年七月)、ヘボン編訳慶応三年(一八六七)『和英語林集成』(復刻版、松村 明・飛田良文解説、一九六七年一〇月)には、そういう見出し語は載っていない。ただ、明治五年(一八七二)刊『和英語林集成』には、「SHU-I, n.」という語の対訳として、「main object」とあり、そのPART SECONDのENGLISH AND JAPANESE DICTIONARY MOST IMPORTANT ENGLISH WORDSの中に、

OBJECT, n Ate, Meate, Kokorozasi, Mokuteki,

SUBJECT, n Koto, Omomuki, YOshi, Wake,

Shitagaumono,

とある。

以上でみると、「subject」「object」という用語は、すでに慶応三年頃から辞書の上に見られるが、その対訳としては、「主観」「客観」以外の訳語が用いられていることがわかる。「主観」「客観」が日本の社会科学分野の訳語として紹介されたことは、前述した通りである。そこで両語の成立時期を具体的に知るためには、日本における洋学の受容について調べる必要があると思う。

III　日本における洋学の受容

(1)技術学の強要

日本における洋学[注(8)]の受容は、享保年間（一七一〇年代）に、その発端をもちながら、一八六〇年代にいたるまで、日本人の精神構造の変革に係わる近代ヨーロッパの精神諸科学・社会科学の受容において、ほとんどみるべきものをもたなかった。[注(9)]

八代将軍吉宗による「享保の改革」（一七一六年）は、支配者の手によるもので、封建的身分制秩序を維持するための、復古的反動的なものであった。そのため、洋学は思想としての世界観的要素を極力排除され、単なる技術学の強要という制約下に置かれていた。それ以後「蛮社の獄」[注(10)]や「番書調所」の設立[注(11)]などの一連の過程をへるが、この制約は幕末まで続く。幕末までの日本人の洋学観というのは、佐久間象のいう「東洋道徳、西洋技術」（和魂洋才）が普通の通念であった。しかし、一八六〇年代を前後として、維新後活躍するおもな思想家たちによって、西洋技術の背後には西洋道徳があり、それが東洋の道徳よりまさっているということが看破され、精神構造の転換がおこるようになった。一八六〇年代を精神構造の転換の時期と見るのは、福沢諭吉の最初の欧米巡覧（万延元年一八六〇）、加藤弘之の日本初の立憲改政論『隣草』の刊行（文久元年一八六一）、日本初の精神科学分野での留学生としての西周・津田真道のオランダ派遣（文久二年一八六二）などが、全部この年代に行なわれたことを目安にしたものである。

(2)精神科学の受容

日本における精神科学の受容は、先に述べた西周・津田真道のオランダ留学と関係が深いといえよう。特に西周は近代ヨーロッパの社会科学を、日本に最初に紹介し、「哲学」という用語を、日本ではじめて使った人物としても知られている。

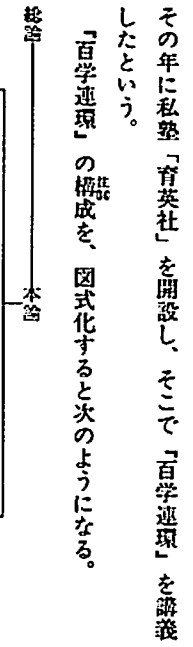
留学するまでの西周について、簡単にみることにする。西周

は石見国津和野の藩主亀井家の歴代の侍医の家に長子として生まれた。藩命により医学から転じて藩学たる「朱子学」を考究した。しかし、一八歳の時、「古学」に接してから「徂徠学」に深く傾倒するようになった。さらに二五歳の時に、「今より後見を立て道を行はんと欲せば西学竟閑くべからず」と、脱藩し洋学を考究するにいたった。そして、二九歳の時「蕃書調書」教授手習い並として登用され、幕府の知能的技術官僚として幕政に参加するにいたった。

西周はオランダで留学する間、コント（Comte）の「実証主義」思想、あるいはミル（J. S Mill）の「功利主義」の思想を研究し、慶応元年帰国した翌年（慶応二年）に、「開成所」[註33]の教授に任命された。当時は幕藩体制崩壊の兆しが見えはじめた頃で、留学の成果は十分発揮できなくて、一八七〇（明治三年）明治政府によって登用するまで、不安な日々を送ったという。しかし、徳川慶喜にしたがって京都に滞在していた慶応年間に、「百一新論」が起稿されたという。[註34] 明治元年、沼津兵学校の頭取として就任した。在職する間の明治二年に、兵学校に併置された文学科で、「論科」（論理学）の講座を設け一部講じた。その時の講義案が後述する「学原稿本――致知学第一篇」である。明治三年明治新政府の官僚として登用される。

その年に私塾「育英社」を開設し、そこで「百学連環」を講義したという。

「百学連環」の構成[註35]を、図式化すると次のようになる。



右の図でみると、「特殊学→心理上学→哲学→哲学歴史・致知学」のように、社会科学の諸科目は特殊学の中に属されている。これらの科目に対する講義が行なわれた明治三年頃には、この分野における学術用語が訳されていたと考えられる。

以上でみると、西周は社会科学分野における日本初の留学生であり、帰国してからはこれらの分野に係わる科目を講義していたことがわかる。こういうことからみると、社会科学分野の訳語である「主観」「客観」は、西周が造語したのではないかと考えられる。また、前述の「百学連環」をはじめとする明治七年以前の西周関係の書物の中には、「此観」「彼観」という用

語が見られる。この両語も西周の造った訳語らしい。（この両語は、どの辞書の上にも載っていない。）

Ⅳ　西周関係の書物における訳語

明治七年以前に使われていたと考えられる「此観」「彼観」とそれ以後の「主観」「客観」とは、どんなつながりをもっているのだろうか。実際の用例に即して見ることにする。

一　「此観」と「彼観」

(1)『百学連環』

この中には「哲学歴史」や「致知学」を論ずる所に、両語が見られる。「哲学歴史」や「致知学」は、前述した『百学連環』の構成図からみると、「心理上学」の中でも「哲学」の分野に属していることがわかる。このように「此観」「彼観」が、「哲学歴史」や「致知学」（論理学）の中に見られるということは、「主観」「客観」が、明治一〇年代の哲学や教育・心理・倫理などの学術用語辞典に載っていることと関係があると考えられる。次の用例は、「はじめに」の部分での引用した例の続きである。

(i)此観とは物に就いて其理を論するを言ふなり。凡そ学問たる此二ツに相関係して之に外なることなし。今致知学と称するものはこの此観に就いていふところにして未タ物に就かざる以前にその道理を思考するにあり。大学に所謂致知格物とは彼観よりいふ所にて、更に異なる所なり。（A、一四八P）

右でみると、「此観」とは「物について其理を論するを言ふ」とあり、「致知学」とは「この此観についていふところにして」とある。これによって、「此観」が「理の考究」に係わる作用であることがわかる。そして、『百学連環』の第二篇、哲学歴史を述べる部分にも、

(ii)GermanにMetaphysic Schoolなるあり。（省略）此カント以前の学者は殆と神理に近きものにて曖昧たるものなりしか、カントに至りて異表の論説に及へり。即ちその説にTranszendentai reinen Vernunft（殺上純粋智）とて、人心なる物にて他の物あるにあらす、心はtime（時）&spaceとの考へに入るものにて、万事時と所に依て生するものなりと言へり。subjective（此観）、objective（彼観）なるものは即ちカントの発明に依るところなり。

Fichteの説はI（た）see（観）a（田）treeとて、吾より樹と見るものにて、樹に形体あるものにあらすと言へり。即ち此観に就くもの

なり。セルリンの説は万物は皆神の顕ハレ示すところにして、吾より見るものにあらすと言へり。即ち彼観なるものなり。（A、一八〇P）

のように、トイツの学派の説明の中に、「subjective」「objective」の訳語として、「此観」「彼観」が記されている。

(2)『致知啓蒙』（明治七年七月刊行）

この中には、次でみるように、「此観」は「subjective view」、「彼観」は「objective view」のように対訳されている。

致知ノ文字、大学ノ面アリテハ、致知ハ、格物ニ在リトイヒテ、此観「subjective view」ヨリ、ト云ヘルト、彼観「objective view」ヨリ、云ヘルトノ差メニテ、（B、三九一P）

この『致知啓蒙』は、西周が生前刊行した主著の一つで、日本では初めて試みられた形式論理学の解説書である。明治七年の刊行にいたるまで、たびたび稿があらためられたという。（B、解説六三八P以降参照）その過程をみると、次のようである。

(イ)『学原稿本』～第一稿本、一冊（明治二年の起稿とされるのは、表紙に「己巳南呂起稿」とあることによる）

(ロ)『五原新範』～第二の稿本、一冊　第一の増補本（筆記年代明記はないが、第一稿本より少しおくれて、明治三年の上京以降、同六年一月以前の時期と推定）

(ハ)『致知啓蒙』　刊本、二冊（上巻はほぼ『五原新範第一巻』＝第三稿本であるが、第二稿本の欄外に、第三稿本の成立以後にくわえられた訂正によることもある。下巻は第一稿本の『学原稿本』の最後の十三、十四章がこの本の一四章にあたる。）

右に挙げた稿本や刊本では、いずれも最初の部分に「致知学」を説明する部分が出る。そこで、(イ)、(ロ)本の中に、(ハ)と同じ内容にあたる部分の場合、「此観」「彼観」がどう書かれてあるか、比較してみることにする。

(3)『五原新範』

第一巻、学原篇（第一章）、学原大旨の中に、

致知は、格物にありてといひて、此観よりいへるも、彼観よりいへるとの、けじめにて、（B、三四五P）

と、「此観」と「彼観」の右側に「。」のしるしがつけられており、上欄の余白に、「subjective」「objective」という英語が書かれてある。

(4)『学原稿本』

さるに其書の面ヲにては知ることを致すは物に格るにありと向かへていへるといひて向ひていへるとの差にて（B、

三〇九P）

右には、「此観」「彼観」のたわりに、「向かへて」と「向ひて」が見られる。このことから推測すると、明治二年頃はまだ「此観」と「彼観」が使われていなかったかのようである。

(5)『生性発蘊』

右の稿本は西周の哲学上の主著で、完成されたのは明治六年の六月であることが自記によって知られる。しかし、その構想はかなり前から徐々に形成され、まず明治三、四年頃からであることは、この稿本の内容に関連する『霊魂一元論』[註19]やその他の断片類から推して考えられる。さらにコント哲学に対する傾倒がオランダ留学時期からとすれば、構想の種子もそこまで遡り得るであろう。（以上、Aの解説六一八P以降参照）

この中に「此観」「彼観」は、西洋哲学史を概説し、東洋と比較しながら締めくくる部分に見られる。次でみるように、「此観」「彼観」に、それぞれ片仮名で、「オブゼクチヘコムテムプラーシウン」「シュブゼフチヘコムテムプラーシウン」と表記されている。

(i)哲学ノ興ハルハ、大率人文ノ半ハ開ケシ時ニスラ、既ニ其萌芽ヲ、開視トスル事ニテ、イト古クヨリ、然ル「ナルモ、始メヨリ性理ノ論ニ、及フ者ニ非ス、ソノ初ハ、必ズ夫ノ仰テ象ヲ天ニ観、俯シテ法ヲ地ニ察スルテフ、

ⓚ彼観ヨリ始マル「ニテ、或ハ宇宙ノ主宰ヲ仰キ、或ハ万有ノ盛美ヲ賛称シテ、彼ヨリ、見解ヲ開ク「ナルカ、其極ニ至リ講究ノ力及ハサルニ及テ、顛ミ反リテ、

ⓛ此観ヨリ看破シ、彼ヲ知ルニ主ナル己ノ己ノ主ナル心、心ノ主ナル性理ヨリ、見解ヲ立ル「、自然ノ理法ト見エタリ、

（B、三八P）

そして、注ⓚⓛに、次のように、

此彼ト云ハ致知学ノ語ニテ、原語英シュブゼクチーウ・コムテムプレーシウン、オブゼクチーウ・コムプレーシウン、物ヲ観ルノ方法ヲ立ルノ道、其端緒ヲ彼ニ在ル目的ヨリ始マルヲ彼観ト云ヒ、目的ヲ我ヨリ端緒ヲ始マルヲ此観ト云フ」

両語の概念が説明されている。この他にも両語の用例は、次のように見られる。

(ii)坤度ノ哥爾（ガル）ニ異ナル所ハ、其方法此観ヲ先ニスル在リ、即心意上ノ見象官能ヲ察シ、其由ヲ生スル所ノ次序ヲ定メ、而シテ、交互ノ関係ヲ審カニスルナリ、

坤度此観ニ因テ得ル所ノ効ハ、哥爾ノ彼観ニ因テ立タル方法ト終始相対核シテ、相戻ルコトナシ、（B、一四五P）

以上の用例において、「此観」「彼観」のさす内容を、前述した『教育　心理　倫理術語詳解』に載っている「主観」「客観」の概念と比較してみることにする。

主観	内界即心意中より発生する百般の情想	客観	吾身の外に在りて、吾五官に感ずる根本の物ある智、外界、非我
此観	物を見る端緒を我より始まること、彼を知るに主なる己の己の主なる心、心の主なる現法、心意上の見象官能を察す	彼観	物を見る端緒を彼ある目的より始まること　象を実に見、法を地に察すること、彼より見解を開くこと。

右でみると、「主観」「此観」は、「内界＝心＝我」が中心になっているし、「客観」「彼観」は、「外界＝物＝我身の外」が中心になっていることに、共通していることがわかる。つまり、物の見方の方法において、一致するということで、その表す概念も、あまり差がみられないといえよう。

二　「主観」と「客観」

今まで「主観」と「客観」については、『心理学』の中にその用例が見られると指摘された。実は『心理学』より一年早く刊行された『知説』に、次のように「主観」と「客観」という用語が見られる。このことから明治七年以前にすでに両語が、訳語として使われた可能性はありうると考えられる。

(1)『知説』一（明治七年刊行、『明六雑誌』一四号に掲載）

…智ノ寔質ニ資シ、慣習ニ依テ各種ノ定状ヲナス者ニ三ツアリ、曰ク才、曰ク能、曰ク識、才ハ智ノ渋ル所、客観ニ属シ、一部ノ中ニ就テ精ヨリ精ニ及フ者ナリ、（省略）能ハ智ノ渋ル所、主観ニ属シ、必ス精ニ及ハス、能其類ニ及フ者ナリ（B、四五二P）

(2)『氏著心理学』（明治一一、一二年刊行、二冊）

右の訳書の中には、「主観」が三五例以上、「客観」が二八例以上見られる。用例数は、おもに上冊に集中されており、その中でも、四部の「直覚力」に多く見られる。

「主観」については、「サブゼクチウ」と片仮名の記されているものがある。その用例は次のようである。

(i)本来ハ、意識ト名ツクル者ハ、凡テ自己ノ意ヲ含ム者ニテ主観ニ就キテ言フ者ナリ（上冊、五十五P）

(ii)一層綿密ニ、此能力ノ状ヲ見ル時ハ、此中ニ、二様ノ元ヲ、含ムコトヲ見ル、是他ノ語ヨリ寧ロ主観、及客観ナルヘ語ヲ用ヰルノ、勝レルニ如カサルナリ（上冊、七十九P）

「客観」の場合、一番最初に出る用例は、次のようなもので

あるが、片仮名は附されていない。

(iii)注意ノ目的ハ、意思ノ目的ト同ジク、自ラ之ト相応スル諸種アリ、意識ノ如ク、心意自己ノ情状ヲ、目的トスルコトアレトモ、又意識ト異ニシテ客観上ノ現実物体ノ総テノ連絡ヲ、悉ク目的トスルコトアリ、(上冊、六十二P)

この本の中には、「主観」「客観」の単独の例だけではなく、次でみるように、「―ノ＋名詞」、「名詞＋ノ―」のような使い方も多くみられる。

(iv)或人ハ、之ヲ、唯斯心ノ感動、即チ感覚トナシ、外部ニ、客観ノ実在ハ、何主ニ限ラス、是アル莫ク、外界ノ物体ノ、コノ形質、他ノ形質ト、云フ差別ニ非ス、唯主観ノ情ナルノミ、(上冊、五百P)

(v)…即チ約メテ言ハ、、本来ノ知覚ノ客観ニ就キテノ元行ノウエニ、(省略)(上冊、百八十四P)

また、前に挙げた『哲学字彙』には、英語の「subjective」「objective」の対訳として、「主観的」「客観的」という用語が載っていた。しかし、ここではそのような用語はなく、次のような「主観上」とか「客観上」という用語が見られる。

(vi)美妙ハ、客観上ノ者タリヤ、ハタ唯主観上、即チ情ニ発スル者タリヤ(上冊、五百四P)

以上、『知説』や『心理学』の中でみると、「此観」「彼観」という訳語はみあたらない。調べた所、この両語が「主観」「客観」と、同じ資料の中に一緒に使われている場合はない。こういうことからみて、明治七年を前後として「此観」「彼観」の代わりに、「主観」と「客観」が使われたのではないだろうかと推定される。

V 「此観」「彼観」から「主観」「客観」へ

はたして「此観」「彼観」から「主観」「客観」への交替は、可能なものであろうか。その交替の可能性について、もっと具体的にみることにする。

まず前述した通り、互いに物の見方において、そのとる方法が似ていることが挙げられる。そして、訳語の原語を比較してみると、たとえば、明治一一年版の『心理学』の中には、「主観」に「サブゼクチウ」とあって、その原語は、形容詞であろうと推測されるが、これは「此観」「彼観」の原語と通じる例である。「客観」の場合は片仮名の記された例がみあたらず、比較する適当な用例はないが、「主観」の場合を参考にすると、原語はやはり形容詞型ではないかと考えられる。

次の表は、西周関係の書物の中における「此観」「彼観」の対訳になっているものをまとめたものである。ここで「此観」「彼観」の対訳についてみると、「主観」「客観」の原語である「subject」「object」の「形容詞型」や、その「形容詞型＋名詞」の合成語の形であることがわかる。今まで見てきた西周関係の書物の中には、「主観」「客観」の原語が「subject」「object」であると、確定できる用例はない。かえって「此観」「彼観」の原語と同じであるのではないかと思われる。

	刊行、起稿年代	此観	彼観
五原新論	明三―六年の一月起稿と推定	subjective	objective
致知啓蒙	明七年七月完本	subjective view	objective view
百学連環	明三年一一月以降の筆録本	subjective	objective
生性発蘊	起稿は明三、四年と推定 明六年、六月完本	シュブゼクチヘコムテンプラーシウン	オブゼクチヘコムテンプラーシウン

また、「此観」「彼観」と同じ内容をさすと見られる部分に、「主観」「客観」が用いられていることからも、交替の可能性はあるといえよう。前に挙げた『百学連環』の中には、西洋哲学史の概要を述べる中で、カントの説があり、「此観」「彼観」が使われていた。それと同じ内容が明治一一年版の『心理学』の中にも見られる。ところが、この本の中には同じ内容の所に、次のように、「主観」「客観」が用いられている。

韓圖、並ニ其学派の諸人ハ、時間ト、空間ト、両ナカラ、唯主観ノ者ナリト視、唯此心ノ理解ニシテ、此心ヨリ、外界ノ物ノ上ニ被ムルヲシメタル形状ニシテ、唯意思ノ理法、即チ理解タルヨリ外、絶テ相対スル実在アル英シト、言ヘリ、（上冊、四四九P）

故ニ、時間ハ唯観念ニシテ、此心ノ理解タリト、謂フ可ラス、又唯、前後ノ関係ナリト、謂フ可ラス、此其一義ニ就テ見レハ、客観ノ実在タリ、（上冊、四五八P）

そして、「此観」「彼観」と「主観」「客観」が交替できることを端的に示してくれるものとして、西周の残した覚書の中に出てくる「哲学関係断片」が挙げられる。

(1)「哲学関係断片」（明治六年以前のメモと推定、上限は明治三、四年頃）

次の(i)のメモに、［彼観］［理］とある。これによると西周が「力観＝彼観＝客観」「理観＝主観」のように、考えていたことがうかがわれる。また、(ii)のメモに、「主・客」「此・彼」

が対称する用語である点から、「主観＝此観」のように考えられる。これらのメモが明治六年以前の記入だとしたら、すでに明治六年以前に、「主観＝此観」「客観＝彼観」のように、西周

(i)

matter
実 在実 虚 space
stof (質料)
property 性 念観 時 time
force 客観(性力) 主観(理)
形 数 number
(B、一七五P)

実ハ虚ニ依リテ立チ虚ハ実ニ依テ立ツ
然モ虚ハ必ス実ヲ兼ネテ実ハ虚ニフクマル
是ニ由テ
性ハ実中ニ存ス　然モ時無レハ性ナシ故モ性ト云ヘハ
多少永続ノ意アレハナリ
力ハ実性ノ発スル所然ルニ発スル前ニ発スル理アリ
実ハ必ス形アリ形アレハ数必ス之ニ従フ

(ii)

時	実	空				
実	主	因	全	性	体	括
名	客	果	分	力	用	概
実在		因果	全分	性力	古今	彼此

(B、一七六P)

が構想していたことがわかる。

(i)の下の説明は、前述の『生性初蘊』の内容と一連の関連がある部分であると見られる。また、これに似た内容が明治一七年起稿の『生性筍記』の中にもある。

(2)『生性筍記』

西州輓近之説、第二形質之中、又区為二、軽重、硬軟、堅固、流動、疏緊、平滑等、謂之力学上客観之形質、声色、臭味、寒熱等、謂之生理上主観之形質、此説不為無理、蓋客観上形質、専属物之性、主観上形質、生於我物相和之中也、(B、一五三、一五四P)

VI　おわりに

以上西周関係の書物を資料として、訳語としての「主観」「客観」の成立過程についてみた。「主観」「客観」は、日本には西洋の「論理学」や「哲学」「心理学」などの社会科学分野の学術用語に対する対訳として使われた。その原語はすでに慶応年間に見られるが、他の対訳がなされていた。両語の造語者は、社会科学分野における最初の留学生であり、帰国してその分野に係わる著作をたくさん残した西周ではないかと推測され

る。西周関係の資料の中で見る限り、両語が訳語として使われたのは、明治七年頃からであるらしい。ただ、明治六年以前に西周の構想の中には、両語が存在していたようである。明治七年以前には、西周の造語した語とみられる「此観」「彼観」が用いられているが、おもに帰国後、西周の学術分野における活動がはじまる明治三、四年からみられる。明治七年以降は用いられていないことから、明治七年を前後として「此観」「彼観」の代わりに、「主観」「客観」が使われたようである。後に「主観」「客観」が、明治一四年の『哲学字彙』に英語の「subject」「object」の対訳として載ることにより、学界などで段々広く用いられたのではないだろうか。

注

(1)『近代訳語考』の中に所収、東京堂、一九六九年、八月

(2)西周がアメリカのJoseph HavenのMental Philosophy（一八六七年）を訳したものである。大久保利謙氏の解説によると、この翻訳はまず前半を明治八、九年に、文部省版和装本三冊として刊行した。明治一一、十二に至って同じく文部省洋装本で完結した。上冊は明治八年版の再版、訳者の凡例、著者序文、本文で構成されている。下冊は新しい追加である。

(3)物郷正明・飛田良文編、東京堂、一九八六年一二月。

(4)資料としては、大久保利謙編の『西周全集』をもちいた。これには二種類ある。一つは、『西周全集』第一巻（『百学連環』『百一新論』収録）、日本評論社、一九四五年二月。もう一つは、『西周全集』第一巻、宗高書房、一九七〇年三月である。資料の引用の時は、前者をAとし、後者をBとする。

(5)難波常雄他二人編、『中国人名辞典』上古から近世まで、誠進社、一九七八年四月による。リイウ李雄（晉）字仲儒。特の第三子。身長八尺三寸、容貌魁偉とある。

(6)『近代日本学術用語集集成』第一巻に所収、龍渓社、(3)の辞書の場合もこれと同じ本に所収。

(7)東京大学出版会、一九六六年四月

(8)ここにいう洋学とは、徳川幕藩体制下において、「蘭学」、あるいは「蛮学」という名称で呼ばれたヨーロッパの諸科学ならびにヨーロッパの諸事情の研究全般をさすものである。

(9)以下、宮川秀著、『近代日本の哲学』、弘草書房、一九六一年一月参照。

(10)一八三九年起きた、幕政批判、西洋知識吸収につとめる江戸後期蘭学者に対する弾圧事件。

(11)一八五三年ペーリ来航を契機に欧米の列強の外圧を排除しうる海防対策を樹立するため、欧米の科学書、特に軍事科学書の翻訳を通じて科学技術を移植し、あわせて技術者を育成するため設立。

(12)文久三年（一八六三）に「蕃書調書」が改名されたもの。「天文地理百工之技芸」を包括する機関にまで拡充拡大された。

(13)明治七年三月刊行。以下、『西周全集』に収められている資料の起稿年代や刊行年代は、全部AとBに載っている大久保利謙氏の解説にもとづく。

(14)注九と同じ、三五P参照

(15)明治三年頃の起稿とみられる。この本は実験心理学の知識を基礎として自己の哲学的立脚地を見出して、これを体系化する努力がみられる。

(16)西周の稿本にはまとまった著作、論文のほかに、種々の問題を書き留めた数冊のノート、及びかなりの紙片が残っている。これらは西周の学問思想の形成を研究する上に貴重な資料となるものである。この全集に載っているのは、帳面三冊から哲学関係のものを抜粋したものである。(B、解説六二九P参照)

(17)西周の残したノートは、その内容が『霊魂一元論』『生性発蘊』の脱稿した明治六年以前であることは疑いなく、上限はまず明治三、四年頃東京に帰住した時期ではないかと思われる。(B、解説六三二P参照)